



Title	現代文芸学からみたヘイドン・ホワイトの物語理論への展望：島崎藤村の『破戒』・『夜明け前』との関連において
Author(s)	高, 暎子
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41334
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	高 藤 子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 14323 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	現代文芸学からみたヘイドン・ホワイトの物語理論への展望 ——島崎藤村の『破戒』・『夜明け前』との関連において
論文審査委員	(主査) 教授 森谷 宇一 (副査) 教授 上倉 庸敬 助教授 加藤 浩 助教授 出原 隆俊

論文内容の要旨

本論文は、現代アメリカの歴史思想家ヘイドン・ホワイトの物語理論を解明するとともに、それをふまえてリアリズム文学と歴史小説との物語性を島崎藤村の『破戒』と『夜明け前』という両作品に即してあきらかにしようとしたものである。

総論にあたる第Ⅰ部では、物語、比喩、筋立てという概念を中心としてホワイトの物語理論が解明されている。それによればホワイトにおける物語とは、表層のレベルでの説明のしかたと深層のレベルでの認識のしかたとの緊密な結びつきによってはじめて成立するものである。そのさい物語の表層のレベルでの説明のしかたには、ロマンス、悲劇、喜劇、風刺という四種類の筋立てがあり、物語の深層のレベルでの認識のしかたには、隠喩、換喩、提喩、アイロニーという四種類の比喩がある。こうしてホワイトは、詩(文芸)と歴史との差異を認めながらも、物語の組み立て方の「構造論的同一性」において両者は共通しているとしているのである。

各論にあたる第Ⅱ部と第Ⅲ部では、第Ⅰ部で解明されたホワイトの物語理論をふまえて、詩(文芸)のなかで「ありのまま」の言述としてとらえられがちなりアリズム文学と歴史小説との物語性をあきらかにすべく、それぞれの代表的な作品とされる藤村の『破戒』と『夜明け前』という両作品の物語構造が分析検討されている。そのうち第Ⅱ部では、『破戒』を支えている物語性は、1. 筋立ての年代的順序性、2. ことばの象徴性、3. 筋立ての因果性、という三つの原理からなることがあきらかにされている。また第Ⅲ部では、『夜明け前』を支えている物語性は、1. 異なる次元のさまざまな出来事は語り手の思惟の様態によって同じ次元に収束できるとみなすこと、2. 「大きな物語と小さな物語」とを融合させるようにすること、3. 「言葉から歴史に入る」ようにすること、という三つの認識法にもとづいていることがあきらかにされている。

論文審査の結果の要旨

本論文の特徴はなによりもまずテーマの斬新さにあると言ってよかろう。すなわち本論文は、アリストテレスよりこのかた今日でもなお一般には対立的ないし少なくとも異質なものとみなされている詩(文芸)と歴史とは構造論的に同一であるとするホワイトの物語理論を解明しようとしているわけで、このことは詩(文芸)と歴史との双方につ

いての新たにしてより深い認識を示唆するものである。

本論文の特長としてはまたパースペクティブの広さということが挙げられよう。この点で特に指摘しておくべきは、本論文が文学理論といわゆる作品研究との両面にわたっていることで、文学研究においてややもすれば乖離しがちな両面を橋わたししようとする論者の姿勢は貴重である。なかでも特筆すべきは、作品研究に相当する第Ⅱ部と第Ⅲ部が、文学理論に支えられることにより、単なる個別の実証的研究の域を脱してそれなりの広がりや射程とを有する文学的研究たらしめていることである。

このことに関連して本論文の特長としてはさらにその意欲的な研究態度ということが挙げられよう。そのことは参考文献の博搜や図式ないし図表の積極的な活用などにもうかがわれるところである。

以上のように本論文はすぐれた点を少なからず有しているが、若干の難点も目につく。最大の問題点は、詩（文芸）と歴史との構造論的同一性ということが十分に論証されていないことである。また論述にやや皮相ないし粗笨なところが目につく。さらに総論にあたる第Ⅰ部と各論にあたる第Ⅱ部・第Ⅲ部とのつながりが不十分である。そして『破戒』と『夜明け前』との解釈にも不十分さが残る。

このように本論文は若干の不備の残してはいるが、全体としては高く評価されるものである。よって本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位に充分ふさわしいものと認定する。